

六 花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada
cover designed by masami

6月号

貫

山田六甲

一いっ艘そうに漁師一人よ鰻うなぎ捕とり

湖の北は蛙かわずの声なりき

石いす臼うすに桜桃さくらんぼの未熟なる

鳩にの恋夕暮るるまで聞いてをり

浮き苗を足もたつかせ直しけり

田を植えし湖うみの国より風生まる

湖うみの風植田の水に遊びをり

若葉わかば風水路かぜに沿うて走りけり

鴉からすの子風に煽あおられぬたりけり

青鷺あおさぎの胸に映れる水面かな
鯉のぼり膨らむ音の立ちにけり
闇と灯ひのせめぎ合ひある植田かな
天道虫てんとむし漣さざなみへ向き変へにけり
矢車の歪ゆがめる音を立てゐたる
舌先に獲物逃しぬ蟾ひきがえる蜷うづ

追悼 小田元さん

湖も比叡も青葉冷えのまゝ
葭切よしきりの葭に隠こもりてしまひけり
淡海あはうみの蛙を借りて啼く夜かな

衣^{きぬ}すべる音のひそけく蛍の夜
蛍の夜含み笑ひと溜^{ため}息と
黒髪^{くろかみ}の床^{とこ}に流るる蛍の夜
くちづけと汗に飾られゆける肌
鈍^{にび}色^{いろ}に光る水面を糸^{いと}蜻^{とん}蛉^ぼ
ぞろぞろと目高が水面刻むなり
石室^{いわむろ}は涼しさ満たしをりにけり
ひたすらに憎むは我が血義^{よし}経^つ忌^{ねぎ}
蝶^{はね}の翅^{はね}口にはみ出し猫帰る
三面鏡開きしままに浴衣脱ぐ

ほととぎす広がる声の矢継ぎ早
不如ほととぎす歸空切り刻み啼なきにけり
放たれて鏡にとまる蛍かな
夏の蝶矢尻なりの形に落ちゐたり
黒日傘組みたる脚あしの他見えず
開け放つ窓は海へと夏なつやかた館
夏の海列なす船の黒く光る
海底に揺れてをりけり五月さつきやみ闇
水母くらげ浮く硝子がらすの傷の向こう側
鯉こいのぼり遊ばす風となられけり

小田元さんを悼み

春の街

貝森 光洋

雨粒の甘くて春の街を行く
粉という鶯餅の飛んだ距離
闘鶏のすでに眼の跳んでおり
牛と いう 眠りの 塊 花曇
揚雲雀いつか戻らぬ日々も来る

もくめ

梶浦玲良子

盆梅の紅白火花散らしけり
春一番首ながくして夜の崖
蛙葉や西の混み合ふ日暮どき
雪解の灯ニンゲンが海捨てし刻
濡れ縁の木目の走り囀れる

雛

木内美保子

かたまりて野川流るる蝌蚪の旅
雛飾る小指で撫でるほつれ髪
山笑ふ山の小石につまづいて
笛鳴きの転がり落つる山の裾
薄紙にくるまり眠れ雛納め

春夕べ

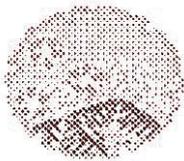
笹村 政子

仕舞ひつつ商ふ露店春夕べ
蛤をひと晩寝かせ雛まつり
遣水の流れに沿へる春落葉
霞出て霞に入れる小舟かな
おぼろかな仏足石を踏みし跡

結納

水谷ひさ江

母の手の温もり褪めず花衣
寝たきりの母の筒袖花衣
春障子結納返し飾れる間
春障子背にして座る新妻よ
客去りてよりのさみしさ春障子



雪樹集

梅見 池崎るり子

暖冬に白梅の香のうすれけり
梅林の人影まばら野良の犬
口あけて満開の梅眺めをり
ひる網のいかなごに人溢れけり
日暮れ来て釘煮くぎにの匂ふ路地の奥

弥生 佐原 正子

福豆を掴む小さき手の力士
柔らかき山の景色や水温みずぬるむ
手捻てひねりの雛ひなていねいに並べけり
菜の花の香りを添へて散らし寿司
雲一つ夜空にありぬ弥生やよいしん尽

つぼみ 岩松 八重

狂言の笑ひに似たる寒鴉かんがらす
蕾つぼみとは気づかぬ大きき冬ぬくし
抱いだきくる桃のつぼみのこぼれ落つ
歳の数食してみたし雛あられ
あと一日飾ひとひりおきたく雛納む

闘鶏のすでに眼の跳んでおり

貝森 光洋

とうけいのすでにまなこのとんでおり

雨粒の甘くて春の街を行く

粉という鶯餅の飛んだ距離

牛という眠りの塊花曇

揚雲雀あげひばりいつか戻らぬ日々も来る

文句なし断トツの巻頭作品。掲句全てが満点である。

闘鶏（蹴合せ）が始まる寸前、眼の血走った興奮状態を「眼の跳んでおり」という言葉を見つけて効果的に表現した。興奮状態と言ったが、それは闘いに挑む軍鶏であり、それを仕掛ける人間や見物の人々の興奮状態を含んだ表現である。闘鶏は「鶏合」の傍題で春の季語。

六花創刊十五周年銀雪賞

横山迪子百句

木^こ枯^{がら}や下校の児らの頬赤き
木枯に幼さ残る唇^{くち}締^しめる
木枯も寿退社の娘^{むすめ}には負け
木枯に神戸の山がゆれてゐる
木枯よ何に怒りて何を哭^なく
恋したの松も淡雪薄化粧
歳^{とし}掃除^{そうじ}日のべの理^{わけ}由^ゆは膝の猫
猫達の首輪を替へて年終^{しま}ふ
のつそりと猫には年の暮なかり
誰が為に惜しむ生^{いのち}命^{めい}ぞ冬の蠅
腕飾るビーズを繋^{つな}ぎ春を待つ
鬼追ひの豆香ばしく噛み砕く
花粉症黒きドレスにマスクして
春セーター煙草をはさむ白き指

喫煙所春着の女性多かりき
青鰻あおぬたに青柳あおやぎ入れて猪ちよこ口空くる
寒もどりお酒呑みたい気分です
やけ酒と愚痴に付きあひ目刺囃む
浅蜷汁身の無き殻を摘つまみけり
到来のワイン封切る春の宵
うららかや女性車輛に眠りこけ
うららかや猫戯たわむるる食事あと
うららかや気分をかへておしやれして
うららかや正後はゆつたり耳掃除
うららかや近くなりたる淡路島
ほうたるの命を燃やす宴かな
螢火の川に浮かびて流れけり
螢火と言葉やり取りお星さま
掌に囲ふ螢静かに灯りけり

激しては死ぬと云ふ子の汗疹あせも掻く
猫たちも夏バテ気味かゴロゴロリ
生きることに疲れたる日よ芒囃む
瘦やせ目立つ浴衣の衿えりをかきあはす
良き事も悪しきも無くて夏終る
秋簾あきすだれ風にやる気をもらひけり
あるなしの風に穂芒さやさやと
歩きたる体型いろいろ吾われ亦も紅こう
肝心のところは云はず吾亦紅
口紅を変へて踏み出す吾亦紅
吾亦紅古希より喜寿の早きこと
堀を行く猫柵ひいらぎをこぼしけり
柵の数へやうなき花の数
ひいらぎは咲けるも散るもひそかなり
山茶花さざんかや笑ふ童女の赤き顔

山茶花や幼き声の過ぎゆける
凍つる夜や猫の寝息が刻きざむ
老猫の夢追ふ視線冬の雲
風花の舞ひのつそりと黒き猫
くさめして澆水ずるりあららのら
唇のよく動く女ちやんちやんこ
バス待ちのコートに顎をうづめをり
口笛を吹いてぴいしゆる春一番
春茶席お作法抜きと老人会
春の風邪猫もくしやみで仲間入り
毛は猫の住民票よ春の塵
春愁や何か足りない昨日今日
思ひ出の良きことばかり草芽生ふ
セーターの手首ゆるんで来てをりぬ

ホッホッチッ鶯未だ舌たらず
野良猫のまだ幼なきが孕みをり
入学や腰までかぶるランドセル
入学祝アニメソングの目覚しを
塩害や桜片側だけに咲く
花の寺今鳴る鐘は会者定離
春燈や古き夢二の詩集選む
通夜終へて卯の花くたしの中帰る
自堕落にピリオド卯の花くたしかな
走り梅雨ごひいきスターのバリトーン
ひたすらに卯の花くたし猫眠る
梅雨晴間猫縄張りを巡回す
雨憎くや逢瀬重ぬる天の河
こころもとなや鵲の橋に雲

七夕や逢ひたき人の名は書かず
星まつり猫の名前も短冊に
星まつり恋に恋するお年ごろ
越し方のプラスマイナス夏星座
親の義理立てて神妙葛ざくら
声かけてあら人違ひ紺日傘
汗拭いて眼鏡を拭いて辞書を繰る
冷房車鳥肌立ちし腕撫でる
秋雨や生命あがなふ脚一本
地虫鳴く断脚の猫ただ眠る
秋高し手術待つ日の誕生日
秋晴れやプーさん電報病室に
山茶花と猫の迎へる退院日
格子戸にメモはさみあり冬の朝

漱石忌読みふけりたる文庫本
寒風かんふうや乱髪らんぱつ駅に並び立つ
冬帽子ブーツすらりと履きこなし
袖無しで出る鼻歌はろくでなし
初春や香水だけはおしやれです
賀状来し泣き虫がもう古希と言ふ
墨の香に心和めりお書き初め
震災日冷雨音無く土濡らす
春蘭しゅんらんの花芽出でたり震災日
春よ来い一歩ぢやなくて駈けて来い
待ち合はせ行き違ひなる寒さかな
待ちぼうけ苾まで冷えて帰りけり
節分の鬼よ喋りに来ていいよ
読書良し海より山より炬燵こたつ良し

六花集

六甲選

出口 誠

花びらを支へる紅き梅の萼がく

くちばしに落とされてなほ八重の梅

泣き疲れそのまま夢へ春の星

春の星退院決まる赤子かな

夢の児の知らぬ間の釘煮くぎにかな

金月 洋子

池の面もに立てるさざ波春めける

一輪の梅にかすかな香りあり

庭隅に咲けり植ゑざる水引草

浅春せんしゅんの庭に小鳥の遊びをり

雪うすく覆へる地より露つゆの臺とう